



アルゼンチン、コルドバ。今私は、交換留学生としてこの大学に通っています。コルドバに着いたのは二月の末、夏の終わりの頃でした。それから早くも約二ヶ月が経ち、学校生活にも慣れて日々慌ただしく過ごしています。時差はちょうど一二時間、季節も正反対という地理的には遠く離れたアルゼンチンですが、いまや新自由主義、あるいは米国の帝国主義への新たな対抗軸として、日本にとっても目が離せない存在となっています。そこで皆様に、一体ここで何が起きているのか、どのような具体的な取

り組みがなされているのかななどを少しずつ紹介していければと思います。まだスペイン語も勉強中の身で不十分な内容ではありますが、あくまで一大学生の視点から見たアルゼンチンをお伝えできれば幸いです。

それでは今回は第一回目ということで、アルゼンチンにおいて社会運動が興隆するに至った背景から簡単に紹介したいと思います。アルゼンチンは、これまでに大きな新自由主義の波を二度経験しています。まずは七六年からの軍事政権期、そして次に九〇年代のメネム政権期です。共に背景には膨大な対外債務の累積とインフレの進行がありました。クーデターで政権を握った軍部による改革は、不十分なインフレ抑制策によって大規模な資本逃避と通貨危機を招き、威信を取り戻そうとイギリスに仕掛けたマルビーナス戦争に敗北し、民政に移管しました。ところが八〇年代末には急速に経済が悪化し、五千%近いハイパーインフレを記録するという事態に至ります。ここで八九年に登場したのがメネム大統領でした。彼は一ドルーベソの固定相場制を導入し、見事に積年のインフレを収束させたのです。元来労働者を支持基盤としてきた正義党が、IMF に優等生として褒め称えられるほど新自由主義政策を貫徹するという一八〇度の転換でした。

こうした奇跡的な経済回復の影には、二〇%に達する未曾有の大量失業と不完全労働がありました。最低賃金の凍結、短期雇用の容認、解雇補償金の引き下げ、電話、電気、郵便事業などの民営化...その他あらゆる新自由主義改革が徹底的に進められたのが九〇年代でした。もちろん国内産業への打撃は決定的で、九〇年代後半には対外債務の返済負担は増加し続け、海外への資本逃避にも歯止めが利かなくなりました。ついには二〇〇一年には対外債務のデフォルトが宣言され、経済は完全に麻痺し、前代未聞の金融危機に発展することになったの



です。二〇世紀前半はアメリカやイギリスに準ずるほど豊かな国であったアルゼンチンですが、この時期なんと約半数の国民が貧困ライン以下の所得水準に陥ったと言われています。二〇〇一年一月二十九・二〇日に起こった民衆蜂起やその他の社会運動の興隆にはこうした背景があったのです。

この頃のことを、ある友人はこう話してくれました。「どんどん生活に必要なものが買えなくなっていった。テレビでは、赤ちゃんに食べさせるものがなくて小麦粉と水を混ぜただけのものを与えているお母さんが泣きながら話していた。治安が悪化して、スーパーや洋服店、銀行ではいつも強盗の危険にさらされていた。道路を封鎖してバスを止め、中の荷物を全部盗んでいくピケテロ集団もあった。コルドバではペソの代わりにレコールという紙がお金として使われるようになった。でも病院ではレコールは受け付けてもらえず、ペソを持っていない貧しい人たちは病院にも行けなくなった。皆、突然全てを失った。」

こうした状況の中、特に民衆蜂起以降、新自由主義の破綻から生まれた様々な社会運動が各地に広まっていきました。あるいは、以前から存在していたそれらの運動が可視化され、大衆性をもったと言ったほうがより正確でしょう。道路を封鎖して政府に抗議するピケテロ運動、地域通貨を用いた社会的経済の取り組み、破産した工場や会社を労働者が自主管理の形で再開する回復会社運動、こうした一連の運動が互いに連帯し、社会的な力をもって現れてきたのです。それまでアルゼンチンにおける社会運動の中心にあったのは労働組合でした。ところがこれらの運動に共通して指摘されているのは、主役がそうした伝統的な枠組みの外にいた人々である、つまり失業者、女性、学生などの入り混じったいわゆる一般の人々であるということです。もはや社会運動は組合員や左翼活動家の専売特許ではなく、地域に開かれた意思表示の空間として、また人々のつながりを再構築していく空間としての機能を果たしているのです。

さて民衆蜂起から約五年半が経った今、それらの社会運動はどうなったのでしょうか？ 経済危機からの脱却に伴ってその多くが解消されていった、と言われているのは事実なのでしょう。本当にピケテロスは政府から補助金をせびるために善良な市民の通行を妨害するだけの集団になってしまったのでしょうか？

そしてこれらの疑問を抱いてはるばる三〇時間かけて日本からやって来た私を待っていたのは、あまりに平穏なコルドバの日々でした。青い空、コロニアルな街並み、広場にはのどかに散歩する人々…。気がかりなことと言えば、夜遅くまで聞こえる馬の蹄の音、つまり馬の引く荷台に乗ってダンボールなどの廃材を集めて暮らすカルトネーロスの姿くらいでした。荷台の上には、まだ四歳くらいの子どもや十代の女の子もよく見かけます。確かにそこには社会のひ



ずみが存在しているのに、人々は何事もないかのように日々を過ごしていく…。米国の帝国主義を批判する南米だからと言って、左派政権のアルゼンチンだからと言って、学生運動の歴史を誇るコルドバだからと言って、日本での生活と何が違うというのだろうか…。



半ばこうした思いに駆られていたある日、大きなデモと集会があるというのでさっそく行ってみることにしました。三月二三日、クーデター三一周年記念日の前日でした。デモ隊はこの静かな街のどこに隠してあったのかと驚くほど巨大な横断幕やプラカードを掲げ、あちこちの通りから結集していきました。いくつもの通りをふさぎながら、普段は歩いて一五分の道のりを約二時間かけて中央広場に到着しました。もうすっかり日の暮れた広場には特設ステージが設けられ、集まった一万人の人々が歌い踊りながらスローガンを叫びます。「行方不明者はここにいる！」「私たちは赦さない！ジェノサイドの容疑者を監獄に！」「フリオ・ロペスを生きて帰せ！（軍事政権を裁く公判における重要証人。半年以上前から行方不明になっている。）」

ここで叫ばれたのは、軍事政権による三万人の行方不明者の真相究明だけではなく、あらゆる不正義に対する抗議、そして人権への要求でした。個別の要求を超えて、このより大きな次元におけるスローガンの下に、失業労働者運動、ピケテロス、学生団体、社会主義運動、さらには同性愛者団体など様々な運動体が結集しているのです。

これがコルドバで私が目にした初めての「社会運動」というものでした。それは普段の生活からはまるで想像のつかない、それでいて確かに存在している、意志をもった人々の姿でした。

